

第百八十七話 生きていた特攻

タイトルに魅かれて福島昴著「二度戦死した特攻兵安部正也少尉」(学芸みらい社)を読んだ。普通の大学生が飛行将校となり、知覧から沖縄に特攻を敢行するも不時着そして帰還、その後、後に再出撃して散華された安部少尉の壮絶なドラマである。



1 沖縄航空特攻(陸軍)の概要

1945(S20)年3月の米軍の沖縄慶良間列島上陸から6月23日の沖縄の組織的戦闘終了までの3ヶ月間に、約三千名の二十歳前後の特攻隊員が、陸軍は、鹿児島県の知覧や万世を含む九州各地から「振武隊」として、特攻を敢行した。

知覧は、大刀洗陸軍飛行学校の分教所として発足し、1945(S20)年3月27日には、第6航空軍の第3攻撃集団が移駐し、特攻の出撃基地となった。知覧飛行場から最初の特攻機が出撃したのは、4月1日であり、6月11日が最後の出撃となった。沖縄戦全陸軍特攻戦死者1,036名の半数近くの439名が知覧から出撃した。

知覧からの特攻機は、なでしこ隊の女学生等の見送りを受け、目印の開聞岳、次いで鹿児島県三島村の黒島を通過として沖縄に直行したのである。

2 新聞報道「生きていた特攻」

本話の主人公安部正也少尉は、福岡県糟屋郡で大正13年3月生まれ、明治大学卒業後の昭和18年10月陸軍「特別操縦見習士官(第一期)」として大刀洗陸軍飛行学校に入隊した。爾来猛訓練を続け、翌年12月特攻兵に任命、昭和20年2月「第二十四振武隊」が編成(9名)、同隊員に指定される。

同年4月29日(日)未明、知覧を出撃特攻攻撃、黒島に不時着した。戦死公報上はこの日に戦死したとされている。実際は、黒島で舟と漕ぎ手を確保して、舟にて5月2日夕刻開聞岳岬に到着、3日基地に帰還した。

5月5日(土)早朝、第二回目の特攻に出撃、この際黒島上空で薬、現金、菓子等を島内の集落に投下した。その後沖縄にて特攻戦死(二回目の戦死)した。

1977(S55)年8月14日付の読売新聞の終戦特集で、「生きていた特攻」とのタイトルで大きく報じられた。また、2005(H17)年8月15日には、フジテレビが終戦特別番組「黒島を忘れない」としてテレビで放映紹介した。(以上「二度戦死した安部正也少尉」福島昴著学芸未来社から関係事項を抜粋)

3 安部少尉の「修養録」

福島昴氏のもとに届けられた安部少尉の遺品の中に「修養録」が含まれており、著者は、同書において修養録の一部を紹介している。安部少尉の修養録は、1943(S18)年12月11日から、翌年12月5日までの約一年間にわたり、飛行少尉の思いの丈を綴ったものである。43頁の文書である。(2)(3)は修養録記載

- (1) 大学新卒の青年が、国家危急存亡の危機に如何に立ち向かうかの決意を赤裸々に吐露している。
 - (2) 「自分らは何故此の教育隊に来たのか。死ぬるためなり。死して後生きんが為なり。悠久の大義に生きんが為なり。死せんが為の道を学ばん。努力せん。死の為に。(以下略)」
 - (3) 神国の天壤無窮を信ず。必勝を信ず。後に続く者を信ず。父母の恩、友の恩、感謝。
- * 十死零生の任務に敢然と応募し、国家に殉じるその心意気に感動を覚える。彼が、“死は生に通ずる”との哲学的境地に達し得たのは驚きだ。特攻出撃前の写真のあの顔の神々しさにも驚きを禁じ得ない。同少尉が至純なる国家防衛の想いをもって従容と特攻に赴いたことに、唯々頭が下がる。翻って我が国の現状はどうだろうか? 国家の安全・安心に無関心な者が多すぎないか?